

離島における居住空間の現代的様態

— 来間島の高齢者の住まい方を事例として —



K08039 上池 旭

Keywords

高齢者 ブナカ
御願 住居モデル

1. はじめに

1.1 研究目的・背景

わが国には6847の離島があり、うち261は指定有人離島となっている。日本の離島人口は43万人で、総人口の0.3%に相当する。近年では離島の高齢過疎化が著しく、離島人口は長期的な減少が続いている。

人口の少ない離島では、地域内で提供できる医療サービスが少ない。現在では、ドクターヘリなどの緊急広域公共サービスが広がっており、救命搬送体制は整備されつつあるが、日常的な医療については、患者自身が交通費を負担して島外に通院せざるをえないことが多い。通院困難な高齢者は島内での移動すらままならないことが多いため、小離島では訪問診療が最も有効な日常的医療の提供手段である。

本研究の調査地である来間島でも訪問診療が有効な手段であり、そのいっぽう在宅医療が未整備であるため在宅医療の在り方を考える必要がある。高齢化にともなってバリアフリーの概念を住宅に取り込むようになってきたが、離島であることから都市部ほど住宅のバリアフリー化は行われていないことが予想される。さらに、現代の社会では核家族が主流であり、それは来間島でも同様である。地域社会のなかでそれぞれの家族の介護能力は小さくなっている。このような社会問題を抱えた離島で、当事者である高齢者はどのように過ごしているのだろうか。

高齢者が多い離島だからこそ、在宅医療や住宅のバリアフリー化に依拠せずに暮らしていけるなんらかの工夫やわたしたちの知らない居住空間と地域社会の関わりがあるはずである。

本研究では、来間島の居住空間と地域社会の関わり方を把握するとともに、高齢者の過ごし方と居住空間に着目して、離島における居住空間の現代的様態を探ることを目的とする。

1.2 研究方法

本研究は、2011年7月25日から8月10日(17日間)の日程で、沖縄県宮古島市下地地区来間において実施した現地調査に基づくものである。現地調査では、住宅の実測、島民へのインタビュー、医療施設に対してのインタビュ

ーを行った。そこから、高齢者の暮らし方、ブナカと呼ばれる社会集団同士の親密度を探り、来間島の居住空間の現代的様態を明らかにする。

2. 調査地概要

来間島は、宮古島の南西1.6kmに位置し、人口163名うち高齢者87名の島である。本島側に面した海岸は高さ40mの断崖となり集落側に緩やかに傾斜している。

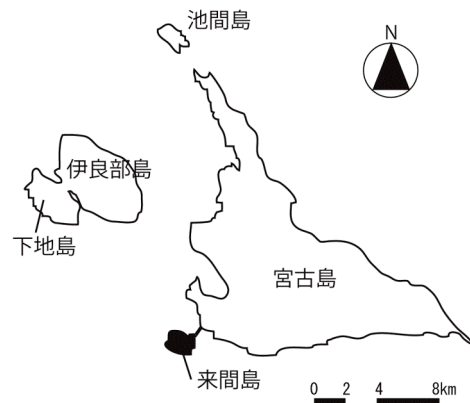


図1 調査対象地

2.1 来間大橋

1995年に宮古島と来間島をつなぐ来間大橋が建設された。これにより来間島では、宮古との政治経済的紐帯はますます強くなっている。それに加えて、観光や移住者の流入などにより、社会は大きく変容している。来間大橋建設以前は、船で来間宮古間を行き来していた。

2.2 福祉施設

来間島には、グループホーム来間とデイサービス来間という2つの福祉施設があり、医療施設は存在しない。医療をうける際には、来間大橋を渡って宮古島まで行かなければならない。グループホーム来間では認知症高齢者の介護を行い、デイサービス来間では島民の在宅介護を主に行なっている。

2.3 ブナカ

来間島の特徴は、全ての島民がブナカと呼ばれる祭祀集団に属していることである。ブナカはこの集落が宮古島から渡ってきた三兄弟を始祖とする伝説にかかわる。その長男家をスムリヤー、次男家をウプヤー、三男家を

ヤーマスヤ（いずれも屋号）と呼び、これらの家を宗家とする子孫たちの集団をそれぞれスミヤブナカ、ウブヤブナカ、ヤーマスヤブナカという。

2.4 御嶽祭祀

御嶽（ウタキ）とは聖地の総称で、山や杜そのものを聖地と考え、そこに石や香炉を置いてイビと呼び、信仰の対象を祀っている。御嶽では村の祭祀をつかさどる司（ツカサ）と呼ばれる神女を中心に、年間を通して種々の祭祀行事が行なわれる。御嶽は時として人々の立ち入ることの許されない場所であるが、祭りの日は人々が神と交流する場となる。そこに集う人々は祈りの中で安らぎを得るとともに、終日神とともに過ごして村の繁栄や家族の健康と守護を祈り、祝う。



写真1 御嶽

2.5 住居モデル

来間の伝統的な間取りと生活様式は図2のように示される。住居の中心部に仏壇を置く特徴がある。それぞれの空間に対して宮古特有の名称があるが、それを以下に示す。

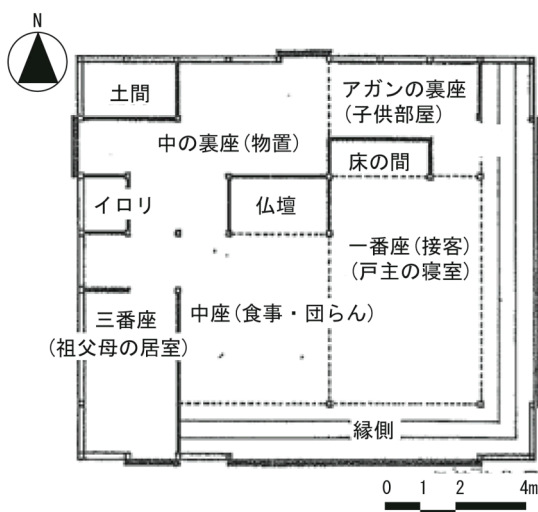


図2 住居間取り

・一番座…主に客間として用いるが、夜は、寝室を兼ねることが多い。床の間と神棚がある。

- ・アガンの裏座…衣類、貴重品などを保管する所。また、子供がいる場合には子供部屋にもなる。
- ・中座…仏壇があり生活の中心の場。食事の間であり、くつろいだりする空間でもある。
- ・中の裏座…穀物などを保管する場所。物置。
- ・三番座…祖父母の居室。

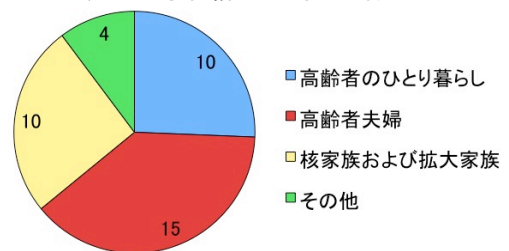
3. 来間島における高齢者の生活

調査では、34軒の住居を実測した。さらに、39の家庭、福祉施設にインタビューを行なった。来間島には老人保護の体制として宮古島市社会福祉協議会に加え、2.2に示したような福祉施設がある。しかし、これらの施設だけが来間島の高齢者の生活を支えているのではないと筆者は考える。ここでは、インタビュー調査をもとに高齢者の日常的な生活を考察する。

3.1 家族構成

来間島の家庭を高齢者のひとり暮らし、高齢者のみで暮らしている夫婦、核家族および拡大家族、その他の4つの家族構成ごとに分類し、考察を進めていく。

表1 家族構成の割合 (件)



3.2 家族構成による高齢者の生活の特徴

高齢者の日常的な生活を探る上で家族構成の違いは大きな影響を与えると考えられる。ここでは、家族構成ごとに具体例を挙げながら高齢者の生活の特徴を述べる。

3.2.1 高齢者のひとり暮らし

ひとり暮らしの高齢者といってもゲートボールで友人と遊んだり、宮古島に住む息子が親の住む来間島に定期的に訪ねるなど日常的な生活のなかで多くの人と関わっている。

3.2.2 高齢者夫婦

同じ高齢者夫婦といっても特別な特徴や共通項は見当たらなかった。毎週火曜日に行なわれている女性の集まりや観光地、畑などでの島民同士のコミュニケーションの場がいくつか見受けられる。

3.2.3 核家族および拡大家族

住居No.108など高齢者を含まない家庭もみられる。家族で生活をしている場合、息子が買いものに連れて行くなど、高齢者の日常的な生活を支えていることが多い。

3.2.4 その他

同居や高齢者がいない家庭に注目した。住居No.7の場合は来間のなかでも特殊なケースで、お互い配偶者を亡くした男女がともに生活を送っている。近くに家族が住んでいないため、お互いが生活を支えながら暮らしている。移住者してきた家庭もあり、特殊な家族体系をもったケースがみられる。

4. ブナカと御願（ウガン）の関係性

前節では、高齢者の日常的な生活を述べ、外からの協力、コミュニケーションが大きく関わっていることが分かった。それに加え、来間島のブナカや御願（祭祀）といった在来の社会システムが高齢者の生活にとって重要な位置にあるのではないだろうか。ここでは、そうした観点から来間特有の社会集団であるブナカと御願の関係性を探る。

4.1 祭司（ツカサ）選定

祭祀構造の中心には儀礼を司る神役が位置し、なかでもそのリーダーとなる祭司が重要な存在である。その祭司を決定することは、祭祀の存続を左右する大問題である。南西諸島では一般に、この決定の根拠に特定の系譜を認め、世襲によって地位の継承が行なわれている。

4.2 ヤーマス御願

ヤーマス御願は、スムリヤーブナカ、ウプヤーブナカ、ヤーマスヤーブナカの三家に一族が集まり、サラピラス（願詞）を唱えながら神酒を酌み交わし島の人々の健康、子孫繁栄そして豊年を祈願する祭りである。祭りは2日間行なわれ、初日は旧暦9月のきのえ午の日に行なう。9月にきのえ午の日がない場合は8月のきのえ午の日となる。牛のような怪物を退治して島を再興した三兄弟の島建てに由来する伝統行事で、下地地区の無形民俗文化財となっている。島出身者が各地から里帰りするのが習わしで、島の人口が膨れ上がり華やぐことで知られている。この他にも計21の御願がある。

来間島では、このような御願や御嶽が高齢者の集う場所となっている。高齢者の生活を探るなかで、御願は重要な位置づけであり、御願のなかで高齢者は4.2で示した祭司のような重要な役割を与えられている。高齢者がいなければ御願は成り立たないのである。



写真2 ヤーマス御願の様子

4.3 インタビューによるブナカの分析

インタビューのなかで、「介護などが必要になった場合に誰が面倒をみてくれるか」という質問を行なった。その結果、親族（息子や娘）という答えがほとんどで、ブナカという言葉は全く出なかった。2.3に示したように3兄弟から生まれたならば、ブナカは血縁関係でもあるのだが、それはあくまでも神話にもとづくものであり家族というカテゴリーとは別のものであることがわかる。これは、来間島への移住者もブナカに帰属できることから読み取れる。つまり、ブナカは来間島に住むことで誰でも属することができ、祭祀の際にのみ機能する集団といえる。

5. 住居モデルの現在

調査でおこなった住民へのインタビューと住居平面実測から例を示し、居住空間が現在どのように使われているかを4つの視点から分析し、居住空間と高齢者の過ごし方の関係性、住居モデルの現在を探る。

5.1 住宅のバリアフリー化

ここでは、来間島で住宅のバリアフリー化がどれほど行なわれ、どのように高齢者の生活を支えているかを実測調査から例をあげ、考察する。

分離されていた風呂、トイレを改築。

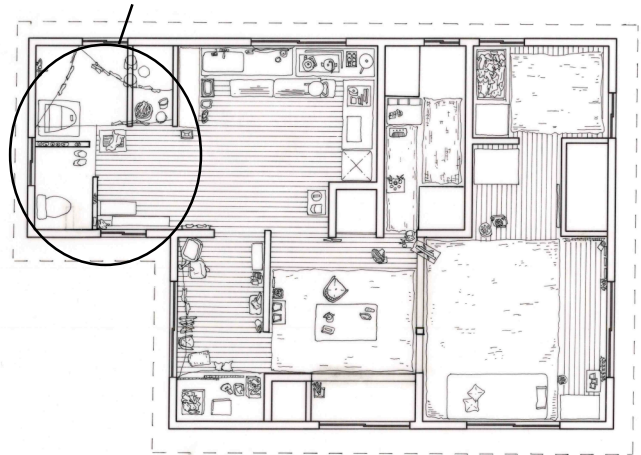


図3 住居No.48平面図(90歳女性のひとり暮らし)

図3に示した住居では、もともと主屋から風呂とトイレが分離されていた。それらを改築の際に、主屋に取り込んだ事例である。

来間島で改築された住宅は18軒確認できたが、バリアフリーを目的とした改築は3軒しかなかった。このことから、住宅のバリアフリー化はほとんど進められていないといえる。

5.2 モノからみた居住空間

ここではモノという観点から居住空間を捉え、高齢者がどのような工夫をしながら日常生活を送っているかを探る。

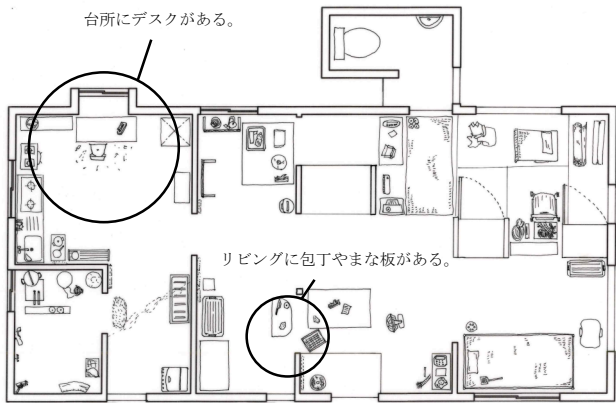


図4 住居No.72平面図(75歳夫と70歳妻の二人暮らし)

図4に示した住居では、空間に対して用途が異なるモノを置くことで、1つの空間に2つの機能を持たせている。ほかの住居では、2番座や3番座が生活の主となりモノが極端に集中している、子どもが家を出て子ども部屋を使わなくなったことにより、使わない空間が生まれたなどの事例がみられた。これらから、住居モデルの機能が変化していることが読み取れる。

5.3 一番座の機能

来間島の伝統的な住居モデルのなかで一番座と呼ばれる空間は、一般的に言うと客間を指している。しかし、実際にインタビューを行なった際に家に客人が来ることはほとんどないという家庭が多かった。では、一番座は現在どのような機能をもつのだろうか。

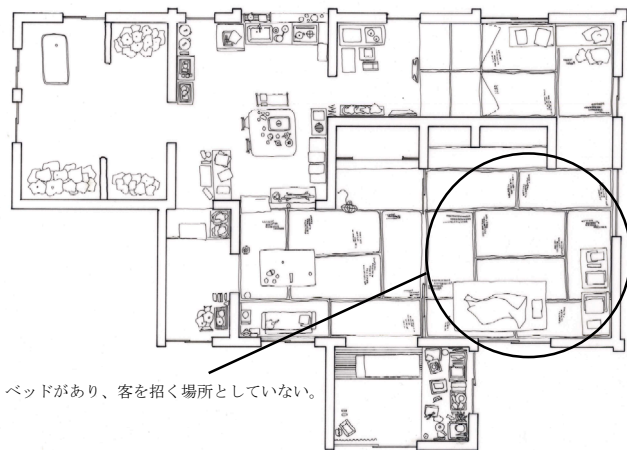


図5 住居No.24平面図(76歳ひとり暮らし)

例のような客間としての機能を失っている住宅がこのほかにも多くみられた。これは、4.2.2でも述べたようにコミュニケーションの場が家の中から外へと変化してきたことから家を訪れる機会が減り、住居内で客間の必要性が低下したためと考えられる。

5.4 新築住居からみた住居モデル

島のなかで比較的近年に建てられた新築住居の住まい方に着目して、高齢者だけでなく来間島民にとって、従来の住居モデルが現在、どのように位置づけられるのかを探る。

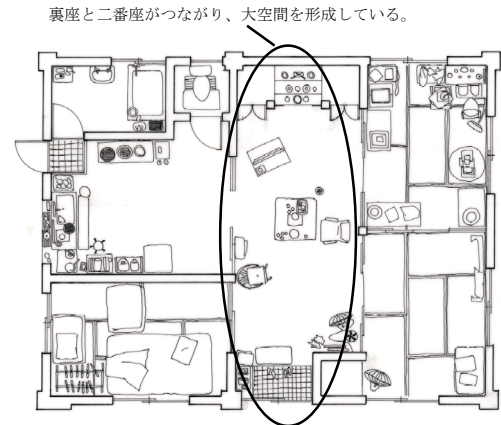


図6 住居No.7平面図(85歳男性、82歳女性の2人暮らし)

図6のように、新築住居は従来の住居モデルとは異なる部分を読み取れる。このほかにも住居モデルが大きく異なる住居もみられた。5.2、5.3のように住居モデルが機能を失っていくなかで、新たに建てられた住居が住居モデルの型にとらわれていないということは、来間島の住居に従来の住居モデルが必要とされていないことを表していると考えられる。

6. おわりに

来間島にはブナカや高齢者が中心となって行なう祭祀文化があり、そのなかで高齢者は重要な役割を与えられている。このような離島特有の地域社会との関わりが高齢者の生活を支えているのである。

近年では来間大橋が建設され、宮古島へのアクセスが容易になった。島民の生活にも変化が表れ、外でのコミュニケーションの場が多くなった。そのため、客人を家に招くなどの住居内でのコミュニケーションの場がなくなり、住居モデルが型だけを残し、機能しなくなりつつある。しかし、来間島では地域社会そのものが高齢者を支えていた。それは、儀礼や祭礼であり、そうした場で維持、再生産される人間関係だった。現在、少子高齢化の日本でも、いずれ人口の変化は起こる。そのとき、居住空間の様態は大きく変化するだろう。だが、社会の中にそうしたシステムがあれば、高齢者の生活は充実したものになる。

参考文献

- 1) 波平恵美子.(1993).系統看護学講座基礎9「文化人類学」.医学書院
- 2) 泰川圭吾.(2010).「離島での在宅医療」.日本医師会.日本医師会雑誌,139(1):143-146.
- 3) 遠藤庄治.(2002).「下地町の民話」.下地町教育委員会